

「小泉八雲図書館」について

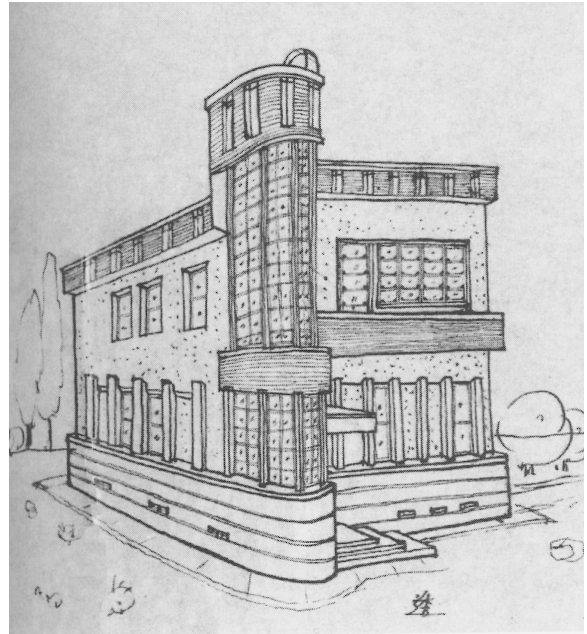
小泉八雲研究者 そめ むら あや こ
染村 絢子

今年は Lafcadio Hearn (小泉八雲 1850-1904) 没後100年である。6月12日、ハーンの令孫小泉時氏と尚子夫人が「ヘルン文庫」を訪れた。3回目の訪問であるが、平成9年に改装されてからは初めてで、蔵書が大切に保存されていることを喜ばれた。

富山高等学校は大正12年、富山、東岩瀬の海運業、馬場家の寄附によって創設された。大正13年、馬場はる子氏は、開校を祝してハーンの旧蔵書2435冊（1352冊が英語図書、719冊がフランス語図書、364冊が和漢書）を高校に寄贈した。

高校の校舎は当時未着工であったので、富山に運ばれたハーンの蔵書は、一旦、富山県庁内に置かれ、大正14年4月、新しい3階建ての図書館の2階に移された。文庫の名称は、「ヘルン文庫」と決定された。ハーンがヘルンと呼ばれるようになったのは、ハーンが1890年4月来日し、同年8月島根県松江の島根尋常中学校の英語教師として赴任した際、県知事との条約書に「ラフカヂオヘルン」と書かれていたからである。加えて「ヘルン」はハーン家の紋章ヘロン（鷺）に通じる響きがあり、さらに松江の人々に「ヘルンさん」と親しく呼ばれたことから、以後「ヘルン」を好んだ。ハーンは「へるん」「邊るん」「邊留武」などの印鑑を作り自らの蔵書に捺すことを好んだ。「ヘルン文庫」の蔵書中、約3分の2の洋書に「へるん」が捺されており、南日恒太郎校長はこれらの事から「ヘルン文庫」と命名したのである。

「ヘルン文庫」を訪れる人は年々増えて手狭になったので、高校は、創立10周年記念に馬場家の寄附により独立した「小泉八雲図書館」を建てることとした。『富山高校十周年史』（昭和8.10.16）は、高校は八雲図書館建設第一回委員会を、昭和8年9月14日開催。2階建て、鉄筋コンクリート、耐震耐火で、目下設計等の計画が着々と進んでいる、と記している。「ヘルン文庫」には日付と設計者名のない建物の透視図〔写真1〕が残されている。県の関係者が設計したものであろう。しか



〔写真1〕実施されなかった図書館「ヘルン文庫」蔵

しこの設計図による図書館は実施されなかった。

昭和8年10月26日、富山高校は山口蚊象氏を高校に招聘し「小泉八雲図書館」設計を依頼した。氏は、昭和7年7月ドイツ留学から帰国したばかりの新進気鋭の建築家で、昭和8年11月竣工した松江の「小泉八雲記念館」を設計した。高校の依頼により山口氏を紹介したのは、南日恒太郎校長の親戚である北星堂書店堂主、中土義敬氏であった。中土氏は松江の記念館建設に関して、山口氏や八雲会に協力を惜しまなかった。

山口氏は「仕様書」と「設計図」を高校に送った。現在「ヘルン文庫」には、この山口氏の設計図23枚がある。棟持ち柱のある高床、切妻の優雅な日本風建築の設計で、山口氏も会心の作と考えていたのであろう、昭和9年6月、東京銀座資生堂ギャラリーで「山口蚊象建築作品個展」を開催して、この「小泉八雲図書館」の模型を出展した。しかし多分経済的理由からこの設計による建築も実現しなかった。（会場を訪れた招待客の中には、当時、日本に亡命していた友人ブルーノ・タウトもいた。）〔写真2〕はRIA建築総合研究所（戦後山口氏が友人と作った会社）作製の模型の写真である。



〔写真2〕 実施されなかった図書館模型の写真。

「小泉八雲図書館」が竣工したのは、昭和10年5月10日。「北陸日日新聞」は「風変わりな白亜の建築 八雲図書館」の見出しで、「全体として日本の茶室の持ち味を生かしていることが特色で、特に床下が神社風に柱で支へられ向こう側を透かして見ることが出来るようになってるのが目立っている」と報じている。初めの設計図と比べると外観は棟持ち柱がなく、窓のデザインも簡略化されていて、趣は異なるが、内部は山口氏の初めの設計が尊重されているように思える。建物の中央に蔵書を収蔵する部屋がつけられ、その中央にハーン自筆の『神国日本』の原稿1,200枚を収める金庫も据えられた。天井には、松江の記念館同様、天窗が作られた。部屋のまわりは回廊式で、学生達の勉強、閲覧のための椅子と備え付けの机が、山口氏によってデザインされた。

この実際に建った図書館の設計図は見当たらない。写真も数葉残されているのみである。〔写真3〕は図書館建築後約1年経った1936（昭和11）年7月26日 P.D.Perkins によって撮影されたものである。パーキンは *Lafcadio Hearn A Bibliography of His Writings* (1934. 4. 30) を夫人と共に著した。「ヘルン文庫」にサイン入りの寄贈本がある [H090.11]。氏は市河三喜博士の紹介で三高の講師となり、富山高校を2度訪れている。この写真は最初の時のもので、向って左から、高校の高田力教授、西崎一郎教授、パーキンス夫人、同令嬢と氏名不詳の男性の5名である。高田、西崎両教授はハーンに関する多くの研究を発表している。



〔写真3〕 実施された「小泉八雲図書館」。染村絢子蔵

翌年5月31日パーキンスは、富山高校で2時間 にわたり“Little Known Aspects of Hearn’s American Life”（「ヘルンの知られざるアメリカ時代」）の講演をした。私蔵のパーキンスの書簡類綴りには、高田教授に5月27日に送ったタイプ10枚のこの原稿コピーがある。また「ヘルン文庫」のクリーム色のパンフレット“*The Hearn Library at Toyama Kotogakko*”のタイプ原稿3枚も一緒に綴られている。昭和12年6月7日付「帝国大学新聞」は、このパンフレットについて、富山発の記事として次のように転載している。「…なおパーキンス氏は本校ヘルン文庫の基金募集としてパンフレットを発刊、広く世界のヘルン愛好者に呼びかけ1名1ドル以上の寄附を仰ぐこととなった。従来ヘルン文庫を有してゐながら活発な動きを見せなかった八雲会も感激、寄附及び文庫目録配布等によって基金獲得とともにヘルン関係の図書蒐集に大童の態であり、東大図書館と共にヘルン研究の一大中心地となる日も近いことであらう…」この呼びかけに応じて寄贈されたと思われる本が「ヘルン文庫」にある。

昭和18年公立富山高校は官立に移行、24年国立富山大学発足、25年富山高校廃止。37年10月「小泉八雲図書館」は他の校舎と共に解体。この時南日校長胸像前での式典で、馬場はる子氏のさびしそうな姿が撮影されている。平成8年馬場公園に「ヘルン文庫跡」の碑が建てられ、山口蚊象氏設計の「小泉八雲図書館」復元の話もあったが、まだ実現されていない。蔵書は8回の移動に耐えて富山大学の「ヘルン文庫」で大切に収蔵されている。